

新学習指導要領の実施で授業に変化が起こるか

— 移行期間中の授業について考える —

常任委員 金子政彦

1. はじめに

いよいよ、本年(2018年)4月より、新学習指導要領の移行期間に入る。移行期間中の授業については、昨年(2017年)7月7日付の文部科学省告示に沿って進められる。それによれば、技術・家庭科の授業はすべて改訂された学習指導要領の内容に基づいて進めることも可能である。

さて、新学習指導要領では、日常の授業の変革を促している。この授業に関連して、2点にわたって問題提起をしたい。

2. 2つの問題提起

<問題提起1>

3年間にわたる技術・家庭科の学習を通じて、“技術的なものの見方・考え方”が少しでも身につくよう、指導する内容や方法を考えながら授業を進めてきた。この“見方・考え方”という文言の意味や捉え方が、現行の学習指導要領と改訂された学習指導要領とでは変化しているのかどうかを考えてみた。

以下に記すような受け止め方ではいけないのか(以下、下線ならびに青字は筆者による)。

自然の事物・現象に進んでかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。
(現行中学校学習指導要領「理科」)

「科学的な見方や考え方を養う」とは、自然を科学的に探究する能力や態度が育成され、自然についての理解を深めて知識を体系化し、いろいろな事象に対してそれらを総合的に活用できるようになることである。具体的には、観察、実験などから得られた事実を客観的にとらえ、科学的な知識や概念を用いて合理的に判断するとともに、多面的、総合的な見方を身に付け、日常生活や社会で活用できるようにすることである。とりわけ、自然環境の保全や科学技術の利用に関する問題などでは、人間が自然と調和しながら持続可能な社会をつくっていくため、身の回りの事象から地球規模の環境までを視野に入れて、科学的な根拠に基づいて賢明な意思決定ができるような力を身に付ける必要がある。
(現行中学校学習指導要領「理科」解説)

上に示したのは、現行の中学校学習指導要領「理科」の教科目標と、その中の「見方や考え方」という文言について解説した部分である。このように、理科では「科学的な見方や考え方を養う」という文言について、その解釈を明確に規定しているが、現行の学習指導要領「技術・家庭科」には「技術的なものの見方・考え方を養う」という記述は一切ない。しかし、次に示す、現行の学習指導要領「技術・家庭」の下線部分の文言が「技術的なものの見方や考え方を養う」ことを意味しているのではないかと判断して、授業をしこんできたのである。

ものづくりなどの実践的・体験的な学習活動を通して、材料と加工、エネルギー変換、生物育成及び情報に関する基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め、技術を適切に評価し活用する能力と態度を育てる。

A 材料と加工に関する技術

(1) 生活や産業の中で利用されている技術について、次の事項を指導する。

ア 技術が生活の向上や産業の継承と発展に果たしている役割について考えること。

(内容の取扱い)

(1) 内容の「A 材料と加工に関する技術」の(1)については、技術の進展が資源やエネルギーの有効利用、自然環境の保全に貢献していることや、ものづくりの技術が我が国の伝統や文化を支えてきたことについても扱うものとする。 (現行学習指導要領「技術・家庭」技術分野)

このように、「見方・考え方」は学習の結果として身につくものなのだから、身につけさせるような授業をと考えて実践してきた。

参考までに、現行の中学校学習指導要領の中から「見方・考え方」という文言を拾い出してみると、次のようになっている。

「……読書を通してものの見方や考え方を広げようとする態度を育てる」(国語1年目標)

「文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くする」(国語1年内容)

「文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつ」(国語2年内容)

「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像する」(国語2年内容)

「聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりする」(国語3年内容)

「書いた文章を互いに読み合い、……自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深める」

「……地理的な見方や考え方の基礎を培い……」(社会地理的分野目標) (国語3年内容)

「……当時の人々の信仰やものの見方などに気付かせる……」(社会歴史的分野内容の取扱い)

「……現代社会についての見方や考え方の基礎を養う……」(社会公民的分野目標)

「……現代社会をとらえる見方や考え方の基礎として……」(社会公民的分野内容)

「……図形に対する直観的な見方や考え方を深める……」(数学1年目標)

「……自然の造形や美術作品などについての基礎的な理解や見方を広げ……」(美術1年目標)

「……作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げる」(美術1年内容)

「……独創的・総合的な見方や考え方を培い……」(美術2年及び3年目標)

「……書かれた内容や考え方などをとらえる……」(英語内容)

では、改訂された学習指導要領では、「見方・考え方」はどのように捉えられているのかを見てみたい。以下に示すのは、学習指導要領改訂に対する中教審の審議に現れた「見方・考え方」が記されている部分である。

(各教科等の特質に応じた「見方・考え方」)

- 子供たちは、各教科等における習得・活用・探究という学びの過程において、各教科等で習得した概念(知識)を活用したり、身に付けた思考力を発揮させたりしながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう。こうした学びを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていく。

- その過程においては、“どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか”という、物事を捉える視点や考え方も鍛えられていく。こうした視点や考え方には、教科等それぞれの学習の特質が表れるところであり、例えば算数・数学科においては、事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること、国語科においては、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることなどと整理できる。
- こうした各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が「見方・考え方」であり、各教科等の学習の中で働くだけではなく、大人になって生活していくに当たっても重要な働きをするものとなる。私たちが社会生活の中で、データを見ながら考えたり、アイデアを言葉で表現したりする時には、学校教育を通じて身に付けた「数学的な見方・考え方」や、「言葉による見方・考え方」が働いている。各教科等の学びの中で鍛えられた「見方・考え方」を働かせながら、世の中の様々な物事を理解し思考し、よりよい社会や自らの人生を創り出していると考えられる。
- 「見方・考え方」を支えているのは、各教科等の学習において身に付けた資質・能力の三つの柱である。各教科等で身に付けた知識・技能を活用したり、思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力・人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方も、豊かで確かなものになっていく。物事を理解するために考えたり、具体的な課題について探究したりするに当たって、思考や探究に必要な道具や手段として資質・能力の三つの柱が活用・発揮され、その過程で鍛えられていくのが「見方・考え方」であるといえよう。
- 前述のとおり、「見方・考え方」には教科等ごとの特質があり、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして、教科等の教育と社会をつなぐものである。子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮されることが求められる。
- 学習指導要領においては、長年、見方や考え方といった用語が用いられてきているが、その内容については必ずしも具体的に説明されてはこなかった。今回の改訂においては、これまで述べたような観点から各教科等における「見方・考え方」とはどういったものかを改めて明らかにし、それを軸とした授業改善の取組を活性化しようとするものである。

(2016年12月21日中教審答申より)

教科等の特質に応じた「見方・考え方」

- 家庭科、技術・家庭科家庭分野においては、生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造することを重視しており、家族や家庭、衣食住、消費や環境など、多様な生活事象を学習対象としている。これらの生活事象に係る問題を解決するために、知識・技能を身に付け、それらを活用する学習過程において、教科ならではの「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現することが求められる。
- このような観点から、家庭科、技術・家庭科家庭分野では、「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」を「生活の営みに係る見方・考え方」として整理した。例えば、家族・家庭生活に関する内容においては、「協力・協働」、衣食住の生活に関する内容においては、「健康・快適・安全」や「生活文化の継承・創造」、消費生活・環境に関する内容においては、「持続可能な社会の構築」を主として考察する視点とすることが考えられる。
 なお、この「見方・考え方」に示される視点は、相互に関わり合うものであり、児童生徒の発達の段階を踏まえるとともに、取上げる内容や題材構成等によって、どの視点を重視するのかを適切に定める必要がある。
- 技術・家庭科技術分野で学ぶ「技術」は、よりよい生活や社会を目指して開発されるものであるが、これは、新たな自然科学上の発見の延長上にのみ存在するのではない。安全性も含めた社会的条件、環境的条件、経済的条件などを踏まえて、適切に知識や経験を組み合わせることで最適化することで生み出されている。また、新たな状況下で既存の技術を改良、応用する活動からも技術が生み出される。これらには、開発、生産や廃棄だけでなく、トラブルや災害等への対処等も含まれる。

- このように技術の開発・利用の場面では、「生活や社会における事象を、技術との関わりの視点で捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性等に着目して技術を最適化すること」という技術ならではの視点や思考の枠組みが用いられることが多く、技術分野では、これを「技術の見方・考え方」として整理した。

(2016年8月26日中教審教育課程部会家庭、技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめより)

「見方・考え方」について、現行の学習指導要領に記載されたものと改訂される学習指導要領の元となった中教審の審議内容の記述をそれぞれ見てきたが、“学習の結果として身につく(学習によって身につけさせる)”という現行の学習指導要領のとらえ方に対して、“学習の過程で働かせて質の高い学びにつなげる”という改訂学習指導要領のとらえ方の違いがある。つまり、ある程度、“見方・考え方”はすでに身につけているという前提にたつての授業を考える必要があるということになる。この点については首を傾げざるを得ないが、皆さんはどのように考えるか。

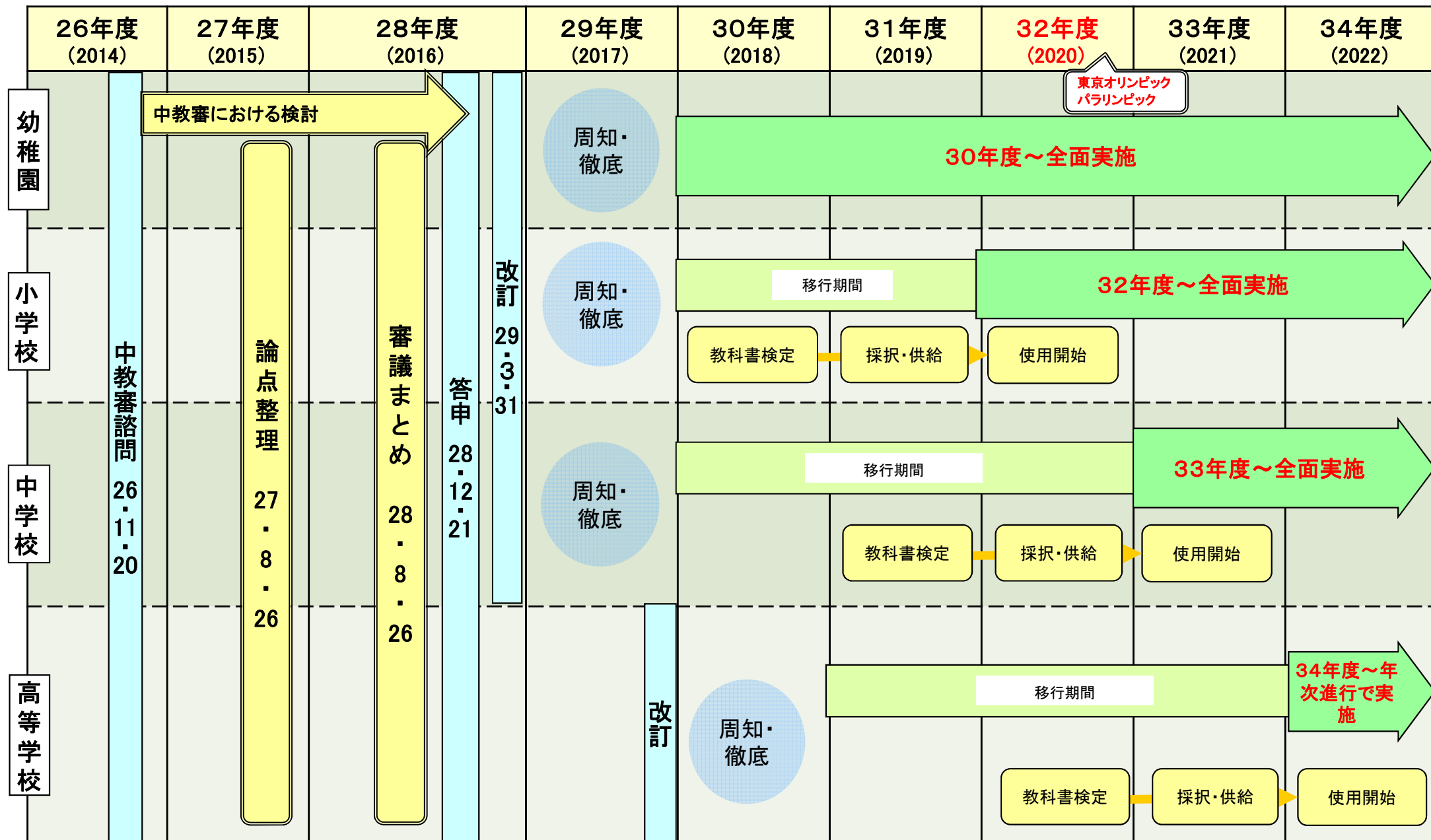
＜問題提起2＞

今回、改訂された学習指導要領では、技術・家庭科技術分野に「〇〇の技術について調べる活動などを通して、△△を身に付けることができるよう指導する」、同教科家庭分野に「……工夫する活動を通して、次の事項：『〇〇の生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けて△△生活を考え、計画を立てて実践できる』を身に付けることができるよう指導する」との文言がある。このように、新学習指導要領では、調べ学習をやったり自ら課題を設定して学習を進めたりと、指導内容が現行の学習指導要領よりかなり高度になっているように感じる。

このような点を踏まえると、これまでやってきたような実習や製作をほとんどしなくても済む指導計画も可能となるのではないか。確かに、改訂された学習指導要領の技術・家庭科には「〇〇ができる」、「技能を身に付ける」、「製作が適切にできる」という文言があり、実習や製作も行うよう求めているが、こうしたことを重視せず、技術室あるいは家庭科室を使わない授業を中心とした指導計画を組むことも可能となる学習指導要領となったと読み取ることはできないか。

今後、新学習指導要領に沿った授業を続けていくとどうなるか。この授業を受けた子どもたちが教員となる10年先あるいは20年先には、実習指導も満足にできない教員ばかりになってしまうおそれがある。だからこそ、次の学習指導要領の改訂を見据え、産教連がこれまで大切にしてきた、頭と手を使い、ものを作りながら必要なことを身につけさせるという実践を率先して続けていくことが重要となってくる。同時にそのための条件整備を内外に強く訴えていく必要も痛感する。

今後の学習指導要領改訂に関するスケジュール（現時点の進捗を元にしたイメージ）



特別支援学校学習指導要領（幼稚部及び小学部・中学部）についても、平成29年4月28日に改訂告示を公示。
特別支援学校学習指導要領（高等部）についても、高等学校学習指導要領と一体的に改訂を進める。